

庁議の概要

開催日：H19.2.13

項 目

- 1 「花・人・土佐であい博」について【観光担当】
- 2 「市町村合併構想（素案）」について【企画振興部】
- 3 その他【危機管理担当、総務部】

内 容

- 1 「花・人・土佐であい博」について【観光担当】

観光担当より、「花・人・土佐であい博」の基本構想・基本計画について説明があった後、意見交換を行った。

【説明概要】

- ・ 事業の目的は、「もてなしの心と交流人口拡大のための仕組みづくり」であり、期待される事業効果は、「来訪者の満足度向上、もてなしの心の広がり、地域の魅力の再認識、交流の仕組みづくり」であり、一過性のイベントのような博覧会ではなく、全国に誇れる高知県の資源をブラッシュアップし、継続的に取り組む観光のメイン事業と考えている。
- ・ コンセプトは、「花と出合い 人に出会う そして 土佐流のもてなしとのであい」、事業の名称は、「あったか高知は華ざかり」をサブタイトルに、「花・人・土佐であい博」とする。「出合い」はひらがなとして青・赤・緑という色で表現し、青の部分は青い空、青い海という高知の印象的な色、赤は太陽、花をイメージ、緑は自然、森林といったものをイメージしている。
- ・ シンボルキャラクターは“くろしおくん”を使用する。国体以来あまり使用されていないが、非常に高知をイメージできる、愛着が持てるキャラクターであり、これを使っていきたい。名刺の台紙を用意しており、4月以降には県職員の皆さんに使っていただくよう、必要枚数を集約する予定である。
- ・ 基本構成は、(1)もてなしの顔をつくる(2)テーマ事業をつくる(3)事業のすそ野の広がりをつくる(4)積極的なPR展開、という4つの展開方針に沿って実施する。展開時期は、平成20年春だが、できるだけ早期にスタートしたい。19年度の中旬位からプレイベントを実施し、できることから発信したい。
- ・ メイン、オープニング的なものとして、平成20年の5月16日から18日まで3日間、「ジャパンフラワーフェスティバル」を高知ぎばさんセンターで開催する。これは全国持ち回りとして、切り花の展示審査会、花卉の普及といったことなどを行うもの。高松、埼玉の次が高知である。次に、「フラワーフェスタ(仮称)の展開」ということで、牧野植物園を中心、モネの庭ほかを拠点とした花のイベントを行う。特に牧野植物園が開園50周年という区切りということ、であい博の中に組み込んで大々的に行いたい。
- ・ 推進体制としては、推進委員会を立ち上げて、この下で事業を進めていく。事務局は「花・人・土佐であい博推進課」。県下を5つのブロック(幡多、須崎・高岡、仁淀川流域、中央、東部)に分けて、ブロック毎に、地域のコーディネーター、NPO、地域支援企画員、市町村などから成るブロック会を持ち、各地域の取り組みを企画・実施していく。各地域では、実行委員会等が中心となって商品の開発などの取り組みをしていく。このように一定、県が初期的な投資や下支えをしながら、全国に発信していく。
- ・ 基本計画では、「もてなしの顔をつくる」計画は、「花」によるお出迎えということ、県内の主要な拠

点を花で植栽をすることとしている。拠点は、高知龍馬空港、駅、高速道路、道路などで、20箇所の拠点にはモニュメントを設置する。主要な道路には花の植栽を行っていきたい。花の育苗や植栽については、県内の小学校や中学校、高等学校、農業大学校など教育機関で種から花に育てていただく。また障害者施設等にも種から育てていただく。それを各拠点、道路に移植していく。地域、市町村、学校、施設などが連携し、植栽・管理を行いながら、まずは取り組んでいきたい。花のモニュメント・プランターには木材を活用し、プランターは6,000ほど配置をしていきたい。

- ・「テーマ事業をつくる」計画については、メインは体験と食ということを考えている。体験と食は高知が全国に誇れるものをそれぞれの地域が持っているので、おもてなしのメニューを全国に発信していきたい。四季ごとにキーワードを用意し、それを組み合わせて、季節ごとのメニューやコースを発信していく。メニューは、主役である地域が企画・運営するものとし、事務局は、直接実施するものもいくつか考えている。
- ・「事業のすそ野の広がりをつくる」計画については、ビジターセンターは、県下4箇所(高知市、東部、西部、嶺北)に設置し、情報案内や情報収集、体験促進機能、ボランティアガイドの紹介も行う。常駐の職員を配置するよう要請を行っているところである。ビジターセンターは、初期投資は県が下支えするが、運営は地域が行う。
- ・「人」と「工夫」によるおもてなし、ということで、現在7つのボランティア組織があるが、これを広めたい。そのため、窓口を一本化し、県としてのボランティア協会といった組織を立ち上げたい。また、大学に地域学の講座を開設してもらい、高知に来ている大学生に是非ファンになってもらう。高知大学、高知女子大学、高知工科大学と話を進めており、2単位を考えている。
- ・「地域」を元気にする、ということで、地域を元気にする取り組みを進めている方や団体を奨励賞として表彰する。また、新年度になったらすぐに、花ごよみ、花マップを作る。
- ・特に考えているのは、「積極的なPR展開」ということで、県内向けPRに終始するのではなく、全国紙、旅行雑誌、インターネットなど全国に大々的にPRしていく。ブーム発信の核となる情報発信として、であい博をやっているということもPRするとともに、四季のテーマ毎に、集中的な情報発信をしていくことによって、静かで深い高知ブームを作り、息の長い高知ファンを作っていこうと考えている。
- ・19年度に、育てていただく学校などに種を配っていき、20年の2月位から植栽をしていく。4月になるとすぐ、推進委員会をまず立ち上げ、併せて、地域の実行委員会を活用し、具体的実施計画の中身を作っていく。その中で、特に早めに取り組めるものについては、秋口からプレ事業を実施していく。例えば、街歩きのコースや、高知城や桂浜のコースなど、すぐに取り組めるものからスタートしていきたい。
- ・部局にご協力をいただきたいことは、花の部分については、教育委員会、健康福祉部、土木部。育苗の部分については、農業振興センター、農業大学、牧野植物園、農業高校。モニュメント・プランターは、木材を利用しますので、林業事務所にご協力をお願いしたい。また、植栽管理の部分では、地域の方々にご協力をいただくので、地域支援企画員、障害者・高齢者の団体、NPO、ロードボランティアの方々。また、庁内体制としては、観光推進本部(仮称)を立ち上げ、本部長に観光部長を置き、おもてなし課に事務局を置く。月1回の開催をする予定であるが、4月早々に立ち上げるのでよろしく願いたい。

【主な意見】

- ・牧野植物園の取り組みは、現在、基本構想を立てているが、考えていることが3つある。(1)温室周辺を整備し、古くからの伝統植物園的に整備する。温室周辺にテラスを作ったり、障害者や高齢者が歩きやすい遊歩道を整備したりする。(2)室内を使つての企画展示。(3)五台山の山頂付近を洋風の花

で飾り、フラワーガーデン化する。また、歴史民俗資料館なども山全体も含めた花づくりもやればおもしろい。もう少し、案を練りたい。

- ・ 「おもてなしの顔をつくる」というのなら、空港から南国バイパスにかけて、この期間中だけでも、例えば、屋外広告物の企業名の部分を1 / 5以内にして、残りスペースに花博に合うような花の絵柄にするとか、土木部と連携して出来ないか。
これから設置する部分は、検討できるかもしれない。
- ・ 名刺の台紙をいただいたが、名刺を渡して「いつ、どこでやっているのですか」と聞かれたら、「です」と言えないとだめではないか。
- ・ (名刺の台紙については、)聞かれたら、最低限、話になるもの、雛型を考えたらどうか。(知事) 季節ごとの花なども含め、検討する。
- ・ かつて花街道を整備するのに、企業を回って、夜も光って、「株式会社が育てている花壇です」と言えるようなものを作った。見えるように工夫してやらないと、企業から「金を出して何になる」と言われる。
- ・ 競馬場も使えないか。ぜひ多くの職員に関心を持ってもらい、参加して楽しむ、という風にしてもらえたら。(知事)

2 「市町村合併構想(素案)」について【企画振興部】

企画振興部長より、「市町村合併構想(素案)」について説明があった後、意見交換を行った。

【説明概要】

- ・ 昨年の11月に高知縣市町村合併推進審議会から市町村合併に関する答申をいただき、その内容は2020年から2030年を想定して、県内を6つの市にしていくというものであった。県としては、それを受けて、市町村合併構想を作ることになっており、企画振興部としてその素案を作成した。
- ・ これからの行政運営を考えると、少子高齢化や財政難が、ますます進行していく中で、将来にわたって、安定した行政サービスをいかに提供していくかということが、これからの課題ではないか。一番簡単なのは、市町村合併で規模の経済を追求しながら、行政の効率化を図っていくということであり、全国的にも普通の考え方である。
- ・ これまでの市町村合併を総括してみると、あそこ合併するのはいやだ、とかいった次元のものもあって、これを繰り返して、果たして行政としての役割を果たせるのか、という危機感を持っている。したがって、我々が作る合併構想では、6ブロックごとに今度は県が事務局として協議の場に入り、これからの行政はどうあるべきか、地域づくりはいかにあるべきかという考え方を、県側から投げかける。それに基づいて、市町村長や議員、地域住民の皆さんに、これからの県のあり方、地域のあり方というものを考えてもらいたい。そうすることが、これからの市町村合併や様々な行政のあり方に対する県のリーダーシップではないか、と考えている。
- ・ 市町村合併というものが、非常に難しい問題を孕んでいる。感情的なもので壊れたりしているのも、同じやり方でやっていって、合併というものが出来るのか疑問。また、市町村合併が「出来ない、出来ない」と言って、このままズルズルと県民サービスが出来なくなるのを待つわけにもいかない。そこで、医療や福祉や教育など最低限度のサービスについては、県民がどこに住んでいても等しくサービスが受けられるような仕組みというものを考えるべきではないかと考えた。市町村合併があろうがなかろうが、高知県に住んでいれば、医療や福祉や教育というサービスは受けられる。隣県に移転をしなくても良い。最高水準とは言わないが、最低限度のサービスを受けられるような仕組みというものを、県と市町村が一つになって、サービスを提供していこうという合意を作っていきたい。そういう県土を作れば、安心

- して子どもを生み、育てる、老後も生まれた所で、安心して暮らしていけるのではないか。
- ・ もう一つの大事な視点は、住民力、地域力を生かした、安心・安全の地域社会づくり、見守り、支え合いの社会づくり。高齢者が山の上で住んでいても、郵便屋さんが見に来てくれるだけで、安心して一人でも住んでいける、隣の人が声をかけてくれるだけで安心して暮らしていける地域社会を作っていけば、何とかやっていけるのではないか。
 - ・ このように支え合いの地域づくりを行い、地域が自立し、最低限度の行政サービスが保障されれば、市町村合併で地域がどれだけ広域化しようとも、あるいは道州制になろうとも、住民票などは例えばコンビニなどで補完しながら、自分たちの生活は自立してやっていくことが出来るのではないか。
 - ・ こうした県、市町村、住民の目指す方向というものを市町村合併構想の基本に据えて、考え方を説明し、自分たちが一番住みやすい、安心して住める地域づくりはこういうことだろう、という議論からはじめて、2020年～2030年に向けたプロセスを踏んでいきたい、ということで市町村合併構想(素案)を作っている。2月15日には幹事会を開き、各部署の意見を聞くことにしているし、また来年度、新たな経営方針を策定するので、例えば、教育であれば、子どもが切磋琢磨できる教育環境とはどういったものか、といったことを順次、詰めていきたい。このようにして、あるべき県の姿、地域の姿を考えていきたい。

【主な意見】

- ・ いつ外へ出すのか。
目標としては、2月議会と考えているが、作業的に遅れており、知事との議論も十分な時間が取れていないので、合意でき次第、外に出す予定である。
- ・ 下り坂の時は、シビルミニマムを維持して、産業政策(どう食べていくか)がないといけない。非常に難しい問題であるし、県のリーダーシップが必要ではないか。
働く世代の人口定着には雇用政策が大事であり、生まれてから義務教育・高等学校までの間、あるいは高齢化した世代をどう守るかということについてさえ、山村の小規模町村では、このままいけば数年で破綻する危険があるので、困難な課題である。だから、市町村合併を考えなければいけないというのが発想の原点で、質問のように、生まれた場所に雇用があって、というのが理想で、そう願わないといけないが、雇用をどう戦略として出せるかということには至ってない。破綻しないためにどう凌ぐか、ということである。
- ・ まとめ方として、県の役割や県の姿の部分など、経営方針に委ねていて、食い足りなさを覚える。少し書けるなら、その部分も少し書かないといけないかもしれない。
書かないわけではないが、「これで大丈夫です」という風には書きづらい。
- ・ 県の役割として、こんな部分を強化します、県がこうします、という部分が弱い気がする。
支え合いの仕組みづくりであれば、県庁全体でやっていかないといけない部分だし、地域ぐるみの教育にしても、県がリーダーシップを発揮してやってきた部分であり、書いていないだけである。また、この合併構想で仕組みを提案しているが、こうした提案を行うのは県しかないし、これが県のリーダーシップであると考え。経営方針と書いているのは、これまで経営方針に基づき協議をしてきたが、最低水準はここまで、といったところまで議論が至っていないので、「経営方針で」と書いたのである。
- ・ 食い足りないところがあるので、19年度になって少し膨らますなど二段階としたらどうか。
- ・ 警察、福祉、教育といったものがシビルミニマムであれば、その費用を稼ぐものがないといけない。
こちらはもう少し消極的で、シビルミニマムの部分は、最優先で充当して、という感覚である。
- ・ この市町村合併構想は、市町村担当者に合併しないとやっていけませんよ、という資料にはなるが、住

民に対して、どうして 町でやっていけないのか、の説明にはなっていない。合併してもしなくても・・・と言うが、合併して失ったものもあるので。

3 その他【危機管理担当、総務部】

危機管理担当より、高病原性インフルエンザ発生概況の説明があった。また、総務部長より、『第4回 取り組み報告会「トライ＆トライ」』の案内があった。